

つなぐ ～全国から福島へ、そして宮城へ～

発行：社会福祉法人わたり福祉会特別養護老人ホームはなしのぶ
2011.5.25



宮城野の里

3月11日に起こった東日本大震災では、わたり福祉会も施設の破損、電気・水道・ガスの停止、ガソリン不足等の影響を受けました。しかし地域の方々やご利用者のご家族からいただいた水や食糧、老福連をはじめとする全国各地から寄せられた支援、そして職員一人ひとりが力を尽くしたことで、何とか未曾有の危機を乗り越え、まだ影響は感じられつつも次第に落ち着きを取り戻しつつあります。

この間はなしのぶでは、避難所での炊き出し、ケアハウスはなしのぶでの被災者の方々への入浴サービスなどの支援活動を行ってきました。そして、宮城県仙台市の「高齢者福祉施設 宮城野の里」で、一般の避難所での生活が難しい介護を必要としている被災者を、福祉避難所「まるふく」として受け入れている現状を知りました。4月5日、宮城野の里へ希望の豆腐と納豆を持って今どんな支援が必要か聞いてきました。答えは「介護福祉士」とのことでした。そこでは、震災以来職員が休みなく働き、介護ができる人を必要としていました。震災直後に寄せられた多くの支援を、今度は私たちが今も不便な生活を余儀なくされている人たちの力になりつなぐ時だと考え、はなみずきからも応援を得て、4名の職員を派遣することを決定しました。

励ます会でたくさんの激励

出発に先立ち4月22日、ケアハウスはなしのぶにて支援活動に向かう職員を励ます会が開かれました。

多くの職員とケアハウスの入居者から、「本当は自分が行きたい。自分の分もがんばって」、「身体に気を付けて」、「留守の間のことは心配しないで」など、励ましやいたわりの言葉が寄せられました。ケアハウスの夢工房からは御守りとして、手作りの『さるぼぼ』が贈られました。支援に向かう職員からは、不安はありつつも、自分にできることをしっかりやってこようとの決意が感じられました。

最後に、全員で「えい、えい、おー」の掛け声でエールを送りました。



多くの激励の言葉が寄せられました



御守りの『さるぼぼ』



えい、えい、おー

声援を胸に、いざ宮城へ

支援には、4月24日～29日と4月29日～5月3日の期間にそれぞれ2名が携わりました。

被災地の状況は想像以上に悲惨なもので、「まるふく」には津波で家が流されるなどした12名の被災者が避難しており、全国各地から多くの支援者が駆けつけていました。わたり福祉会の職員もそれらの支援者と一緒に、介護を必要としている方々に食事やトイレ等の介助をしたり、避難所となっている小学校の体育館で炊き出しや体操などの支援活動を行いました。



「まるふく」での支援の様子



避難所で元気に体操

知らない土地での不安もありましたが、家を無くし、先の見えない状況で自分たちの方が不安を感じているにもかかわらず、笑顔や感謝の言葉を返して下さる被災者の方々に、逆に元気をもらうこともありました。また、全国からの仲間との存在は励みとなり、ともに行動するなかで、助け合うことの大切さや小さくとも力を出し合うことで大きな力となることを改めて実感することができました。



ともに支援にあたった全国からの仲間



全国から届けられた励ましのメッセージ

支援活動で得てきたものを報告

5月9日に支援活動の報告会が開かれました。参加したメンバーから、被災地の実状、支援活動の内容や、感じたこと、学んだことなどが報告されました。「今回の経験を職場の仲間に伝え、介護に生かしていきたい」「介護の仕事をしてきてよかった」などの発言がありました。避難所で行った体操の実演もあり、報告を聞いた出席者からは、ねぎらいの言葉と拍手が上がりました。

今回の被災地支援は、福祉の原点である思いやり、支えあいの大切さを見つめ直すよい機会となりました。これからもできる限りの支援をしていきます。



熱心に報告に聞き入る参加者

支援活動に参加した職員の感想



3月11日の震災による被害に合われた方々で、介護を必要とされる方々を受け入れるために立ち上げられた福祉避難所での経験は、とても貴重な時間だった。私は、4月24日～4月29日までの6日間お手伝いさせて頂いた。

宮城県に向かうまでの間、「何も知らない所へ行って何ができるのだろうか」「邪魔にならないだろうか」「本当に役に立てるのだろうか」「また大きな地震が来るのではないか」などといった不安でいっぱいだった。宮城野の里に着いたのは夜の7時頃だったため、その日は利用者さんの直接的な援助にはあたらなかった。

不安を抱えたまま次の日の朝を迎えた。利用者さんに挨拶をしていた際に「あなたたちがこうして来てくれるから俺らはここにいれるんだよ。」「福島から来てくれたのかい！？そっちはもっと大変なのにありがとうね。」という言葉に、来て良かった。今日から頑張ろう。という気持ちになれた私がいいた。

また、利用者さんからだけではなく、全国から集まって来ている支援者の方々からの「阪神大震災の時に助けて頂いたから、今度は私たちが恩返しをする番だと思ってここに来ました。こういう時こそ支え合ひましよう。」「みんな初対面。でも、助けたいという気持ちはみんな同じ。だから、避難所にいる人たちのために頑張ろう。」という言葉にも勇気付けられた。

地域は全く違っていても、“利用者さんのために”という一つの目的があれば、心が通じ合えるのだということを実感することができた。他県から見れば福島も被災していると同時に、原発の問題があり、支援している場合じゃないのではないかと思われていたかもしれない。しかし、そんな私たちが快く受け入れて下さった避難所の利用者さんや全国から集まって来ていた支援者の方々の暖かさや思いやりを直に感じる事ができた。

“思いやり”や“寄り添う気持ち”は自分の仕事において、利用者さんやその家族に寄せていくことが今の私にとって必要な事だと感じた。人の優しさを知ることが出来た6日間だった。

特別養護老人ホームはなしのぶ 相談室 阿部敬史



私は、4月24日～4月29日の期間、宮城野の里の福祉避難所「まるふく」での支援に参加しました。ここへは介護を必要とする方など、一般の方の避難所では生活が困難な高齢者の方が避難していました。私が参加した期間には12名の避難者の方がいました。支援スタッフは、全国から集まり20～30人いました。避難者の数に対して、支援者の数が多いですが、日中はまるふく内にいる方のケアだけでなく、以前避難していて、家に戻られ方や他施設に入所された方へのケアもしているので、多くのスタッフが必要だと分かりました。

ほとんどのスタッフが1週間ほどの支援の参加なので、毎日スタッフの入れ替わりがありました。仲良くなった支援者の方とすぐにお別れになってしまうのが辛い所だなと感じました。

「ここにずっといたいけどね・・・」と話される方がいました。全国のスタッフの皆さんが避難者一人ひとりに寄り添ったケアをしているから避難者の方にそう思ってもらえるのだと思いました。まるふくの生活はゆっくり一人ひとりと話ができて、急がせるようなく、安心できると所だと感じました。

そして、私も、今働いているケアハウスでも入居者の皆さんに「ずっとここにいたい」と思ってもらえるよ

うなケアをしていきたいです。支援に参加して学んだことを生かして入居者さんに関わっていきたくて思います。

ケアハウスはなしのぶ 生活相談員 尾形沙織



自分に何ができるのか、ニュース等で知る悲惨な現状もあり何と言葉をかければ良いか不安を感じる部分がありましたが何よりも3月11日の震災後より奮闘している支援者達の負担が少しでも軽減できればという思いもあり支援にあたりました。

短い期間ではありましたが、全国から集まった支援者達からもいろいろな事を学ぶ機会となりました。日中は施設に避難する方々の支援にあたり、その後、小学校に避難する方々の運動不足の解消を含め、支援者で集い踊りに行きました。踊りを踊ることで避難者からは元気な掛け声や笑い声が聞こえ、胸にこみ上げるものを感じました。今、皆に必要なものは何か。衣・食・住はもちろんのことですが当たり前のことが当たり前に行えない現状、皆で笑いあえる環境を作ること

も大切なのではないかと感じました。

どうすれば一人でも多くの人の笑顔が見られるか。支援者一人一人が皆のためという思いと、避難者一人一人の不安や悲しみを少しでも軽減させてあげたいという支援者皆の思いがその避難所には溢れていたように感じます。

自分にできることを考え実行に移し、力を合わせていくことが強い力となりそれが繋がりになっていくと感じました。

指定居宅介護支援事業所はなみずき 山田正人



今回、宮城野という見知らぬ土地に足を踏み入れ、支援をするという役目を与えていただき、正直行くまでの数日は不安で仕方がなかった。

支援開始となってからも、被災地へ足を運び、現状を目の当たりにすることで、さらに不安が募っていったことを覚えています。

被災地の現状は、言葉を失うほど悲惨なものであり、福祉避難所で生活されている方々も大半は津波の影響で家を失くした人たちで、「帰る家がない」ということは、これほどにも悲しいことなのかということを知りました。

しかし、支援先では、悲惨な経験をされた方々の中にも“笑い”のある空間があり、支援者と避難所の方々がテーブルを囲んで、他愛もない話をしたり、一緒に料理をしたり。厳しい状況下の中でも、支援者をはじめそれぞれ楽しいこと、嬉しいことなどを率先して取り組み、避難所の方々と寄り添い過ごすことができました。

こんなにも、利用者の方とゆっくりお話をしたり共に取り組みをするって、楽しいことだったんだと改めて実感し、介護の原点を振り返れたように思います。

今後も、同じ被災地だからできること。共感できること。まだまだ大変な状況は続くと思いますが、自分に今できることは何かと考え、頑張りたいと強く思いました。

そして最後に、今回送り出していただいた皆様。本当にありがとうございました。

デイサービスセンターはなしのぶ 山縣美奈